

# 京極読書新聞 <第41号>

発行日 平成25年 1月 1日(火)  
京極町生涯学習センター湧学館

## 余談「平清盛」(最終回)

<『平家物語』を読む会> 講師 村山 功一 (むらやま・こういち)

NHK大河ドラマ「平清盛」は、12月23日で最終回を迎えます。したがって、この“余談”シリーズも今回をもって終了となります。そこで、あらためてドラマ全体を振り返りつつ、ドラマがどのような“清盛像”を造り上げたかを考えたいと思います。

これまでの“余談”でたびたび指摘してきた、たとえば風俗・服装つまり時代考証の問題、史実との関係、『平家物語』との異同等については、(ドラマなのだから、まあ、いいか…)ということにして、ここではドラマ全体を捉えることにします。



京極読書新聞は  
毎月1日発行です。

▲平家物語絵巻「屋島の合戦」

2ページ目へ続きます。

## 1 ページ目からの続きです。

ドラマの前半は清盛の幼、少、青年時代を描き、後半は『平家物語』に寄り添う形で描かれています。実像としての清盛の幼少年時代は、はっきりとは分かりません。したがって、ここは脚本家藤本有紀さんの想像と創造の“腕の見せどころ”でしょう。さらに、担当プロデューサーからの提案で、清盛を中心とした“群像劇”に仕立てたといいます。そういえば、清盛に関わる様々な人物が次々に登場し、そして消えてゆくという慌ただしい展開でした。たしかに多彩であり、物語に深みを持たせはしましたが、視聴者にとってやや煩わしい思いと“消化不良”感を抱かせる結果になったように思われます。

後半は栄華の道をひた走り、その頂点を究めた清盛を描きます。この時期の姿を描く場合、やはり『平家物語』や周辺史料を無視することはできません。ドラマには『平家』(異本の一つ『源平盛衰記』\*かと思われれますが、ここではとりあえず『平家』とします)が描く様々な事件やエピソードが登場します。しかし、それらは必ずしも『平家』そのままではありません。かなりの脚色もあります。もっともこのドラマは“平家”の物語ではなく、清盛の一代記なので忠実に『平家』に拠る必要はないのかも知れません。

では、ドラマはどんな清盛像を造り上げたのでしょうか。『平家』や『日本外史』が造り出した傲岸不遜、悪逆非道のイメージは払拭できたのでしょうか。

このドラマが描いた清盛は、

- ① 河院の落胤という出生の秘密を知り、そのことで終生苦悩する清盛。
- ② “王家の犬”という身分からの脱却を図る清盛。
- ③ 新しい国(武士の世)造りに専念する清盛。

といったところでしょう。



▲余市町・阿倍比羅夫記念碑の前で。村山功一氏。

ところが、これらの全ては解決されることなく終わってしまいます。②、③は達成できたかに見えますが、どうでしょう。“王家の犬”が「朝廷に仕える身分」と同義であれば(当然、同義のはず)、いかに清盛が太政大臣従一位になっても、一門の多くが公卿・殿上人になっても「朝廷に仕える」立場に変わりはありません。また、①についても、②、③を達成するために、あるいは自身の栄達のために大いに利用すべきラッキーな身の上ではあっても、忌み嫌い自己嫌悪に悩むことはないと思います。この悩みは、きわめて現代的です。こうした設定で清盛像を描くと、失敗と挫折と屈辱を一身に背負う姿になってしまうのは当然です。

ドラマが描いた清盛像は、悩む清盛、ナイーブで繊細な清盛の姿であると、私は捉えました。『平家』が描く、位人臣を究め、横暴の限りを尽くした清盛も諸行無常・盛者必衰の理を逃れ得ないという姿でもなく、“権力に憑かれた男(橋本治『双調平家』)”の清盛でもありません。その意味ではたしかに新しい清盛像、清盛観は示されたと思います。ただ、それはやや鮮烈さに欠けた、ぼんやりとした印象の清盛だったように感じました。

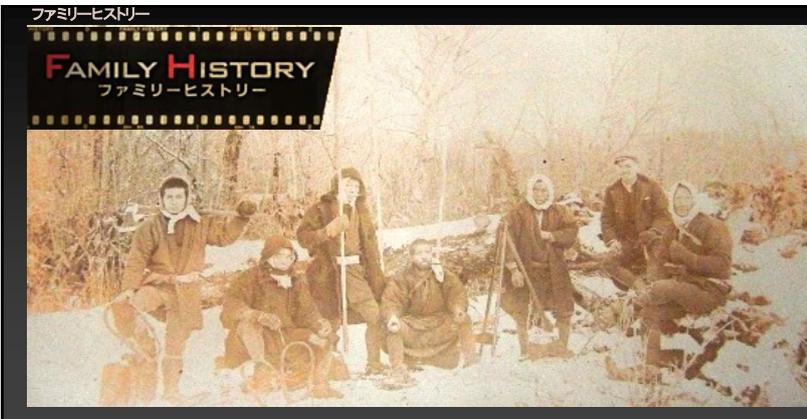
一年間、この“嫌味”たっぷりの〈余談〉とお付き合いいただき、ありがとうございました。何か一つでも興味を引いたこと、印象に残ったことがあれば、望外の喜びです。一年にわたり、貴重な紙面を提供してくださった「京極読書新聞」担当の皆様にご心からお礼申し上げます。 (完)

## 【注】

\*『源平盛衰記』(げんぺいじょうすいき)…『平家物語』の異本の一つ。四十八巻からなる。他の諸本には見られない多くの逸話を収める一方、諸本に多く見られる記事を欠く場合もある。やや暴露趣味的傾向があり、文学としての品性を欠くという指摘もある。

余談「平清盛」を掲載したこれまでの京極読書新聞は、湧学館図書カウンター等にて配布中です。お気軽にお申し付け下さい。湧学館ホームページでも閲覧可能ですので、ぜひご利用ください。

# NHK総合 平成25年1月14日(月) 午後10時～



## 「ファミリーヒストリー」とは？

NHK総合テレビジョンで放送されているドキュメンタリー番組。著名人の家族の歴史を本人に代わって徹底取材し、「アイデンティティ」や「家族の絆」を見つめる番組。

(一部ホームページから抜粋)

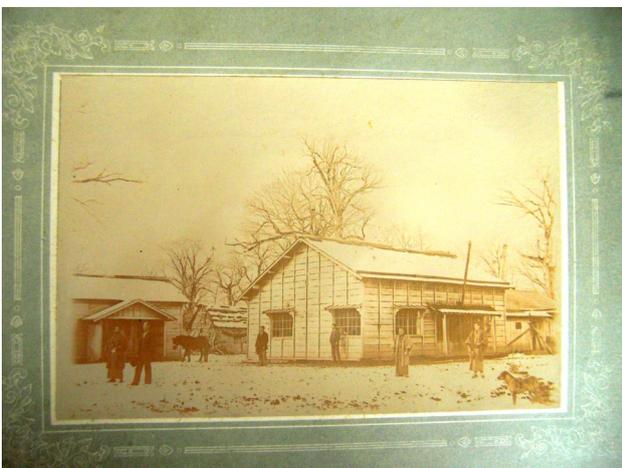
放送時間：月曜 午後10時～10時50分

再放送：金曜 午前0時25分～1時15分

## ファミリーヒストリー「水野美紀」の回に「京極農場」が登場！

1月14日(月)の「ファミリーヒストリー」。テレビカメラは、女優・水野美紀さんの祖父の代がたどった足跡を追います。明治二十年代の香川県から虻田郡向洞翁への移住。そして、さらに京極高德が興した「京極農場」への転出。この地で家族を持った祖父は、狩太(現ニセコ町)へ、昆布(現蘭越町)へと移って行きます。そのルーツは、どこで水野美紀さんの人生と重なってくるのか？

番組製作のため、昨年(2013年)の12月中旬、NHK東京のスタッフが湧学館にもいらっしやいました。「京極農場」こそは京極町発祥の地に他なりませんから、当然、湧学館にも数多くの「京極農場」関連資料が集まっています。たとえば、「京極農場」を語る時に必ずといっていいほど持ち出されてくる有名な上の写真。この原版も、湧学館が橋本家から寄贈を受けたものの中の一枚だったりします。貴重な郷土資料群をふんだんに駆使した今回の「ファミリーヒストリー」、録画の準備は大丈夫でしょうか？(新谷)



▲京極農場事務所

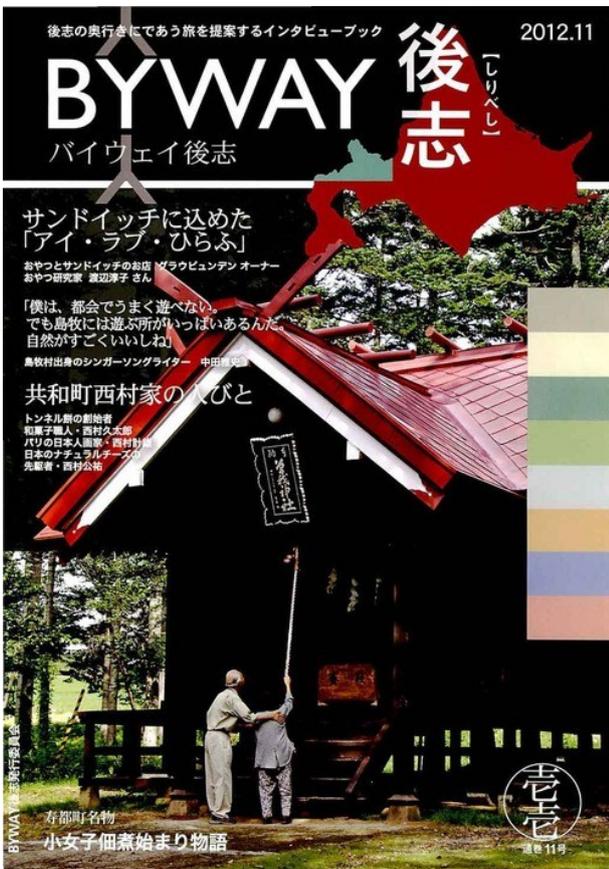


▲現在の京極農場事務所跡

# 後志の奥行きに出会う旅を提案するインタビューブック 「BYWAY 後志」第11号に 新谷保人「文芸作品を走る胆振線」を発表



昨年7月、白老町仙台藩白老元陣屋資料館で行ったブックトーク講演を基に文章化した「文芸作品を走る胆振線」を「バイウェイ後志」最新号に発表しました。現在、書店・コンビニなどで発売中。もちろん湧学館にも蔵書として入っています。以下に引用したのは、「京極農場」に関連する部分です。(新谷)



明治二十八年に羊蹄山麓の御料地が解除。植民地として開放されます。明治三十年、現在の京極町のあたりに「京極農場」が誕生します。農場主・京極高德（たかのり）の行った開墾手法が興味深い。京極高德は、京極家の二人の番頭格、洞爺村に三橋政之、京極農場に三崎亀之助を配置します。そして、すでに洞爺村の開拓で成功を収めている三橋のラインから開拓・農業指導団を京極農場に送り込むという、いわば二人の番頭格を競わせるような形で生産性を上げてゆく方法を使っています。

そして、この農業指導団の中に藤村徳治がいたわけです。この藤村徳治が、明治三十一年、ワツカタサップ川上流に鉄鉱石の鉱床を発見したことによって、北海道のいろいろな歴史が変わって行くのです。

## 発行

京極町生涯学習センター湧学館  
〒044-0101 京町字京極158番地1  
TEL 0136-42-2700(代表)  
FAX 0136-42-2032  
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください  
<http://lib-kyogoku.cubet.com/>

